

AD
220
年から現代の書

書
の
あ
ゆ
み

楷書・行書・草書・そして現代の書

編
者
荒
金
大
琳

目次

○波磔および「之」の文字の比較研究と観察……………	1
○雁塔聖教序における修正問題の提案……………	2
第一章 分裂と統一の狭間で文字……………	4
第一節 漢からの脱出……………	4
第二節 書聖誕生への母なる書……………	30
第三節 書聖王羲之と呼ばれる要因を求めて……………	34
第四節 王羲之の書とは異なるのか、 異なっていないのか……………	80
第五節 新書への動向……………	86
第一項 龍門二十品を中心に……………	86
第二項 鄭道昭の書を中心に……………	96
第三項 北魏の書から新書へ……………	102
第二章 全国統一と書の動向……………	108
第一節 新書から真書へ、そして楷書へ……………	108
第二節 不死鳥・王羲之と初唐の三大家……………	118
第三節 唐と同年代における日本の書……………	132
第四節 太宗の政治と書の動向……………	136
第五節 高宗の政治と書の動向……………	146
第六節 楷書と草書との対比……………	166
第七節 顔真卿が誕生するまで……………	172
第八節 顔真卿の書表現……………	184
第九節 顔真卿の影響を受けて……………	196
第三章 唐からの脱出と書の移行を求めて……………	218
第四章 近・現代の書への移行……………	228
第一節 近代書道への躍進……………	228
第二節 現代書の父たち……………	238
第三節 現代書の父たちの思想を大分の地で……………	250
第四節 書教育の充実を求めて……………	260

現代書への書のため

別府大学名誉教授 荒金大琳

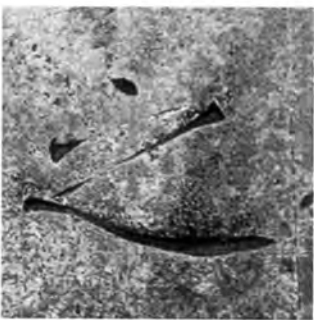













中国の歴史から考えると、それぞれの時代に素晴らしい芸術文化を生み出しているが、漢・唐、そして、皇帝として最後となる清の三つの時代において、大きな芸術文化の活動が特記される。その反動により、漢からの脱出、唐からの脱出、清からの脱出と、各時代からの離脱が次なる時代の芸術文化として新しく芽生えている。

特に、漢と唐のあとには楷書をはじめ行書、草書が新しい形で展開され、周、秦、漢の時代にも見られることだが、正書体と非正書体の関係においては、正書体にあたる楷書と非正書体にあたる行書・草書は見事な発展を見せている。

日本においても、聖徳太子や空海は中国の文化をそのまま受け、そして伝え、新しい日本文化を築きあげた。近代書の父といえる日下部鳴鶴においても日本に新しい書芸術を誕生させる原動力の種をまいている。これらの中国と日本の交流の深さを知っていたたくこともこの著書の焦点といえる。併せて臨書・創作・教育・研究の書芸術の四つの宝が満たされていると、自負している。「中国から伝来された書は素晴らしい力を持っている」ということの周知に務めたい。

表紙 雁塔聖教序
裏表紙 呉昌碩の印
(石人子室)

○波磔および「之」の文字の比較研究と観察

 <p>序記687</p>	 <p>序記249</p>	 <p>序記315</p>
 <p>序記537</p>	 <p>序記249</p>	 <p>序記315</p>
 <p>序記413</p>	 <p>序記260</p>	 <p>序記69</p>
 <p>序記119</p>	 <p>序記77</p>	 <p>序記586</p>
 <p>序記564</p>	 <p>序記216</p>	

○雁塔聖教序における修正問題の提案



序記237

朝



行意を比較する



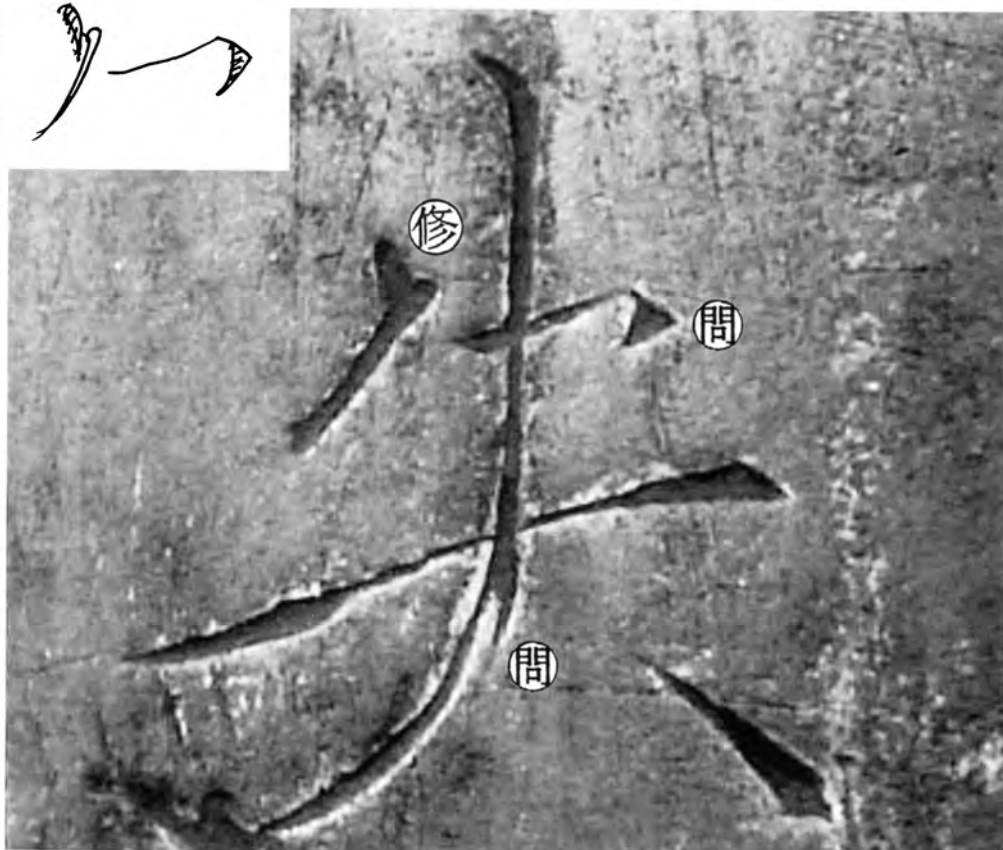
序記520

勝

※詳しくは「雁塔聖教序に関する記録」を参照して下さい。



行意を楷意に改めた結果不自然な線になった部分



失

序492



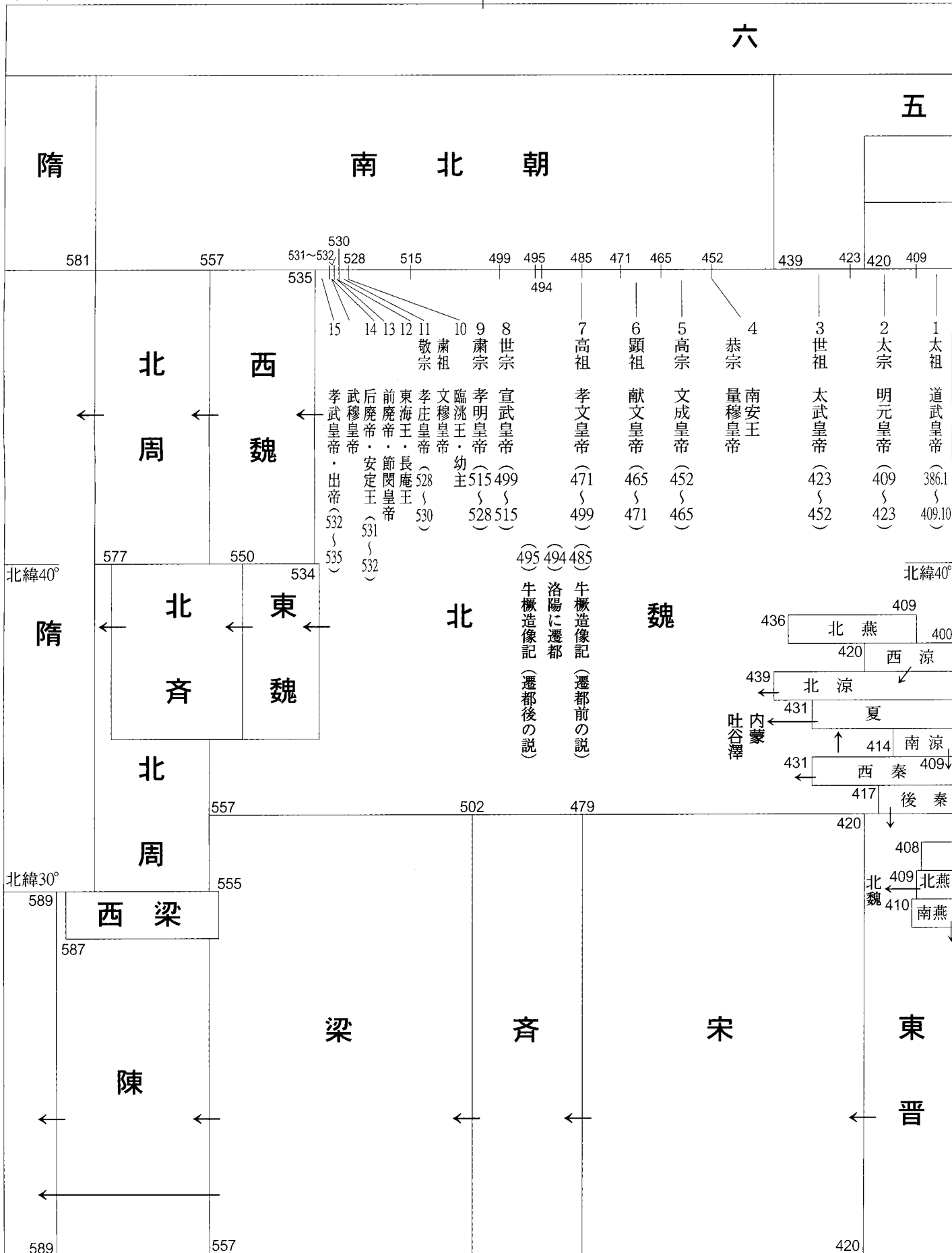
不自然な線



遐(遐)

序787

不自然な線



(86頁へ)
(108頁へ)

<p>晋</p> <p>西 晋</p> <p>290 280 265 258 252 222</p> <p>2 惠帝(司馬衷)</p> <p>1 武帝(司馬炎)</p> <p>4</p> <p>3</p> <p>2</p> <p>1 大帝</p> <p>(吳)</p> <p>(蜀) 后主</p> <p>3 齊帝</p> <p>2 明帝</p> <p>1 文帝</p> <p>(魏)</p> <p>223</p> <p>263</p> <p>265 260 254 239 226 220</p> <p>鳳凰元年(吳)</p> <p>天璽元年(吳)</p> <p>咸寧四年</p> <p>延康(二二〇)</p>	<p>漢</p> <p>後 漢 (東 漢)</p> <p>189 168 147 126 107 106</p> <p>14 獻帝(劉協)</p> <p>12 靈帝(劉宏)</p> <p>11 桓帝(劉志)</p> <p>10 9</p> <p>8 順帝(劉保)</p> <p>6 安帝(劉祐)</p> <p>4 和帝(劉肇)</p> <p>191 190 184 178 172 169 167 158 155 153 151 144 142 136 132 126 121 120 114 107 105</p> <p>熹平二年(一七三)</p> <p>初平(一九〇)</p> <p>中平(一八四)</p> <p>光和(一七八)</p> <p>熹平(一七二)</p> <p>建寧(一六八)</p> <p>延熹(一五八)</p> <p>永壽(一五五)</p> <p>本初(一四六)</p> <p>永和(一三六)</p> <p>陽嘉(一三三)</p> <p>永建(一二六)</p> <p>延光(一二二)</p> <p>元初(一一四)</p> <p>永初(一〇七)</p> <p>興平(二八九)</p> <p>永漢(二八九)</p> <p>昭寧(二八九)</p> <p>光熹(二八九)</p> <p>永康(二六七)</p> <p>永興(二五三)</p> <p>元嘉(二五〇)</p> <p>和平(二四七)</p> <p>建和(二四五)</p> <p>永嘉(二四四)</p> <p>漢安(二四二)</p> <p>建康(二四二)</p> <p>永寧(二二〇)</p> <p>建光(二二〇)</p> <p>元興(二〇五)</p> <p>延平(二〇六)</p>
<p>261~303</p> <p>278 276 272</p> <p>256</p> <p>221</p> <p>186 185</p> <p>172 171</p> <p>169 164</p> <p>156 153 148 142</p> <p>118~123 117</p> <p>○平復帖</p> <p>天發神讖碑</p> <p>晉皇帝三臨辟雍碑(河南省洛陽)</p> <p>譬諭經</p> <p>○宣示表</p> <p>○薦季直表</p> <p>○張遷碑(泰安市岱廟に現存)</p> <p>○曹全碑(西安碑林)</p> <p>○史晨碑(曲阜)</p> <p>○西狹頌(甘肅省成縣摩崖)</p> <p>○郃閭頌(陝西省略陽縣)</p> <p>○魯峻碑(山東省濟寧縣)</p> <p>○熹平元年熹平帝</p> <p>○楊淮表紀(摩崖)</p> <p>○封龍山頌(河北省元氏縣)</p> <p>○孔宙碑(曲阜)</p> <p>○禮器碑(曲阜)</p> <p>○乙瑛碑(曲阜)</p> <p>○石門頌(摩崖)</p> <p>北海相景君碑 ※三つの●印の作品を三頌と呼びます。</p> <p>祀三公山碑(河北省元氏縣)</p> <p>嵩山三闕銘(河南省登封縣)</p>	<p>陸 機</p> <p>索 靖</p> <p>高 貴 鄉</p> <p>鍾 繇</p>
<p>303</p> <p>261</p> <p>269</p> <p>230</p> <p>151</p> <p>陸 機</p> <p>周 顛</p> <p>鍾 繇</p>	

この「書のあゆみ」時代「三国時代」からは漢が終わり、新しい始まりです。書体の分類から見れば、楷書の仲間となる

①漢からの脱出



漢からの脱出
魏呉蜀の三国の武将たちがそれぞれに新しい夢を抱きながら漢からの脱出にあいとロマンをかけ、ただ未来のために精一杯駆けぬけていった男たちの姿にこころときめく。

この時代の代表的な文字②の薦季直表と③の宣示表は古文の篆書体とも、漢時代の隸書体とも、唐時代の楷書とも違います。
漢からの脱出において求められた未来へ向かう出発の書と見るべきかもしれません。
△今週の鑑賞作品▽
①の「漢からの脱出」は三国時代の武将たちに思いを馳(は)せながら、この時代に対する私の印象を作品にしたものです。
漢の隸書の蔵鋒を用い、漢時代の木簡の筆遣

②薦季直表(221年ごろ)
臣繇言臣自遭遇先帝以来

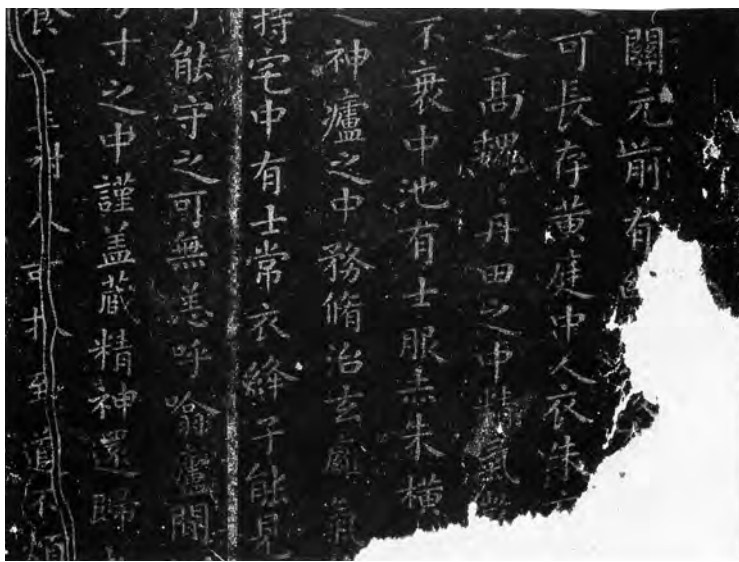
③宣示表(221年ごろ)
尚書宣示孫權所求詔令所報所以博示

漢からの脱出、三国時代

いで隸書から楷書への書体の移行を想像して制作しました。
②と③(二二年ごろ)

遭・遇・添、③の令・報)の形はもつ、隸書から離れていることを感じます。

の作品はとも、蔵鋒(ぞうほう)に筆先を逆方向にまると折り返して入筆する方法)を用いて書かれたのでしようが、露鋒(ろほう)入筆の際、筆先を出して書く方法)の筆跡が多く、右払いのはね(波磔)を見るとき、右下がりの部分(②の



漢からの脱出

尚書宣示孫權所求詔令所報所以博示
逮于卿佐必異良方出於阿是多羨之
言可擇郎廟况繇始以賤賤得為前思橫
所貶睨公私見異愛同骨肉殊遇厚寵以至
今日再世榮名同國休感敢不自量竊致愚
慮仍日達晨坐以待旦退思鄙淺聖意所